

## 近年のフエダイ科、フェフキダイ科の増加について

海洋生産技術担当 石川 陽子

Key word; フエダイ、フェフキダイ、南方系魚種、黒潮大蛇行

### はじめに

徳島県の周辺海域では、長期的に海水温の上昇傾向が見られます(図1)。また、2017年夏以降黒潮大蛇行が続いており、室戸岬で大きく離岸した状態が続いています(図2)。いずれの影響か、あるいはこれらとは全く別の理由によるのか、近年、フエダイ科 *Lutjanidae* やフェフキダイ科 *Lethrinidae* の魚の水揚げが増えているという情報があります。実際私も水揚げの現場で見かける機会が増えました。

フエダイ科、フェフキダイ科は、その分布域を本県以南に広く持つ、いわゆる「南方系」の魚です。徳島県内で獲れるフエダイ科の魚には、フエダイ *Lutjanus stellatus*、クロホシフエダイ *Lutjanus russellii*、ヨコスジフエダイ *Lutjanus ophuysenii*、ウメイロ *Paracaesio xanthura* などがいます(写真1)。「ちびき」「あおちびき」と呼ばれる魚もフエダイ科の魚だと予想しています。フェフキダイ科の魚には、メイチダイ *Gymnocranius griseus*、ハマフエフキ *Lethrinus nebulosus*、イトフエフキ *Lethrinus genivittatus* などがいます(写真2)。ハマフエフキは沖縄では「タマン」と呼ばれ、沖縄3大魚の1つに数えられることもある魚です。

本当にこれらの魚は増えているのでしょうか。

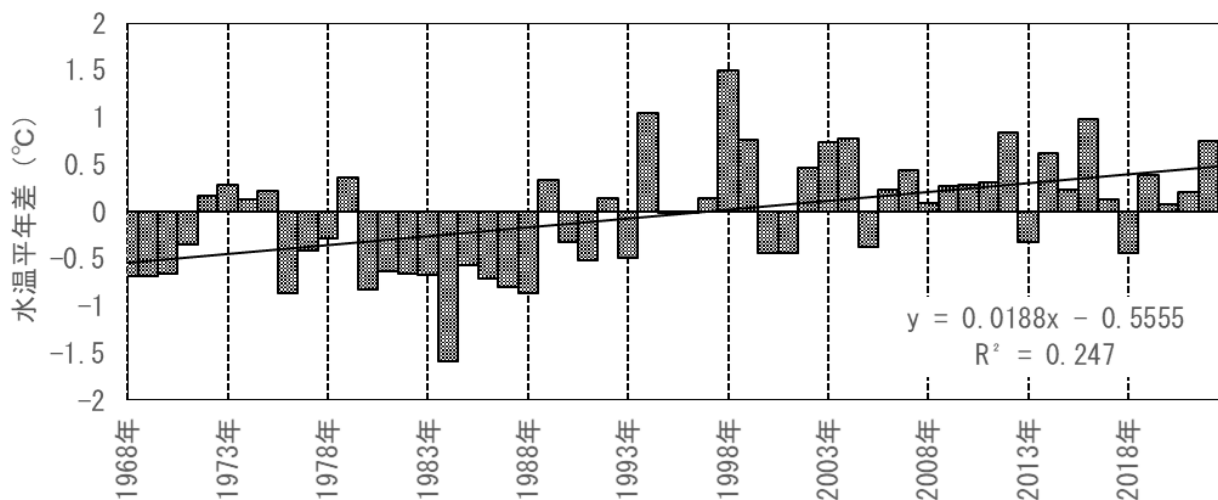


図1. 紀伊水道の観測水温の平年差の推移。平年差は月ごと、定点ごと、水深ごとに算出したものの年平均値

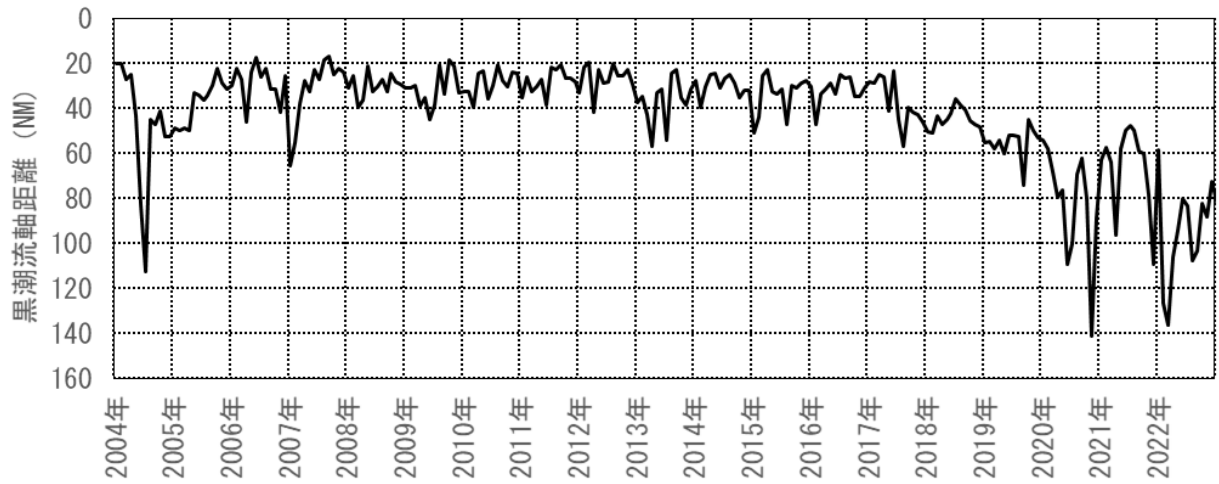


図2. 室戸岬から黒潮流軸までの距離(海上保安庁海洋情報部黒潮流軸数値情報より)



写真1. フェダイ科の魚。左:フェダイ 右上:ヨコスジフェダイ 右下:クロホシフェダイ



写真2. フェフキダイ科の魚。上:ハマフエフキ 左下:サザナミダイ 右下:イトフエフキ

## 調査の内容

水産研究課では、調査の一環として、県内の 16 漁協から、水揚げデータを提供していただいています。今回は、それらのデータのうち、播磨灘、紀伊水道、海部沿岸の 3 海域からそれぞれ標本漁協を選定し、フエダイ科の魚（フエダイ、ウメイロ等）、フエフキダイ科の魚（メイチダイ、ハマフエフキ等）の取扱いの有無、水揚量の推移を調べました。併せて、漁業関係者に聞き取りも実施しました。

また、近隣県の状況について、和歌山県水産試験場と高知県水産試験場にお問い合わせ情報をいただきました。

## 調査の結果1 海域毎の取扱いの有無について

まず始めに、海域毎にフエダイ科、フエフキダイ科の魚の取扱いがあるかどうかをまとめました（表 1）。水揚げが極希で安い魚である場合、水揚げされないケース、「その他の魚」として個別の水揚げの状況が判らないケースもありますが、フエダイ科、フエフキダイ科の魚はある程度の価格が見込める魚なので、適当なサイズのものが漁獲されれば水揚げされ、水揚げデータに揚がってくると考えられます。

表 1. 水揚げデータ上の項目の有無（“×”は無し、ある場合は地方名）

		播磨灘	紀伊水道	海部沿岸
フエダイ科	フエダイ	×	ふえだい	ふえだい、いせぎ
	ウメイロ	×	×	ウメイロ
	ヨコスジクロホシ	たるみ	めたれ	たるみ
	その他	×	あおちびき	ちいき、ちびき
フエフキダイ科	メイチダイ	×	たまみ	めいち
	ハマフエフキ他	くちみ、ふえふきだい	くちび、ふえふきだい	くちび

表1と聞き取りの結果から、少なくとも漁獲サイズのフエダイ、メイチダイは、播磨灘にはほとんど生息していないことが判りました。紀伊水道でフエダイが高単価の魚として認知され水揚げされ始めたのも 2020 年頃と比較的最近です。ウメイロは海陽町の漁協でのみ水揚げが確認できました。ヨコスジフエダイとクロホシフエダイは、本県では、別の魚であることは認知されていますが「たるみ」あるいは「めたれ」として一括して取り扱われています。聞き取り調査から、「あおちびき」はフエダイ科のアオチビキ *Aprion virescens* やイシフエダイ属の魚、「ちびき」や「ちいき」は同じくフエダイ科のハマダイ属、ヒメダイ属の魚だと考えられますが、水揚げ頻度が低く、また単一種を指す呼称でないこととみられることから特定には至っていません。「くちび」と呼ばれる魚も、主にハマフエフキですがほかのフエフキダイ科の魚も混じっていると考えられます。写真2でサザナミダイを紹介しましたが、これは水揚げが希でメイチダイと区別されることがほとんど無いようです。



## 調査の結果2 海域毎の水揚量

次に、海域毎の水揚量の推移をまとめたのが図3です。フェダイ、その他のふえだいい類の水揚げは、変動はあるものの増加傾向と言ってよさそうです。ウメイロは2022年水揚げが激増しました。メイチダイも近年水揚げが多くなっています。その他のふえふきだいい類は少なくとも紀伊水道では水揚げが近年高水準といえそうです。

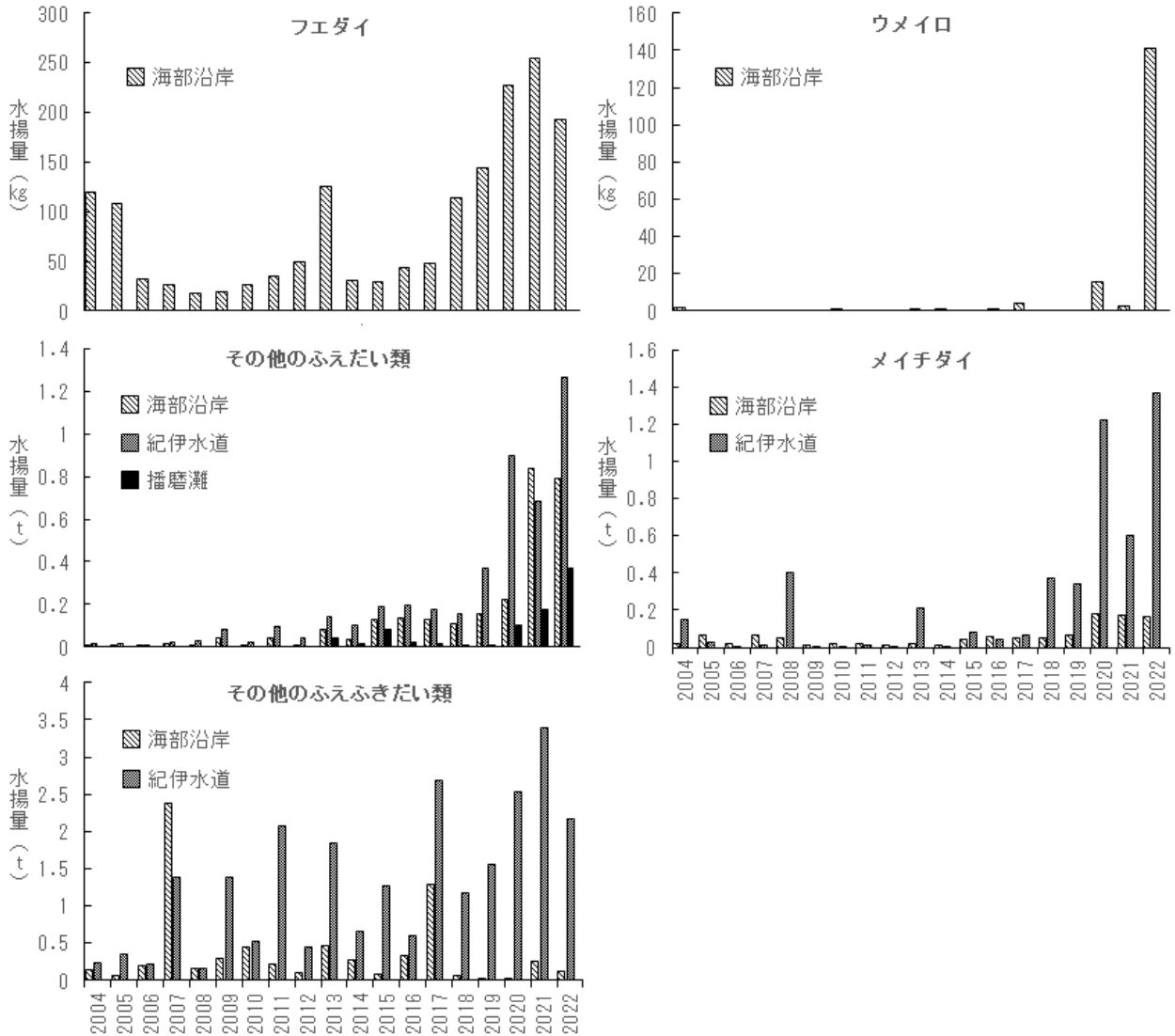


図3. フェダイ科、フェフキダイ科の魚の海域別水揚量の推移。播磨灘1漁協、紀伊水道1漁協、海部沿岸2漁協を標本漁協とし、年間水揚量の推移を示した。播磨灘、紀伊水道のフェダイ、ウメイロ、播磨灘のメイチダイ、その他のふえふきだいい類は水揚量が僅少であったため省いた。播磨灘の水揚げデータは2013年以降。

## 調査の結果3 近隣県の状況

次に、近隣県の水揚量の推移をまとめました(図4)。高知県での水揚げに明確な傾向は見られませんでした。一方で、和歌山県串本町では、たまため銘柄(専らハマフエフキ)が2021年急増し、2022年も9月末時点で3トン以上の水揚げがあったとのことでした。

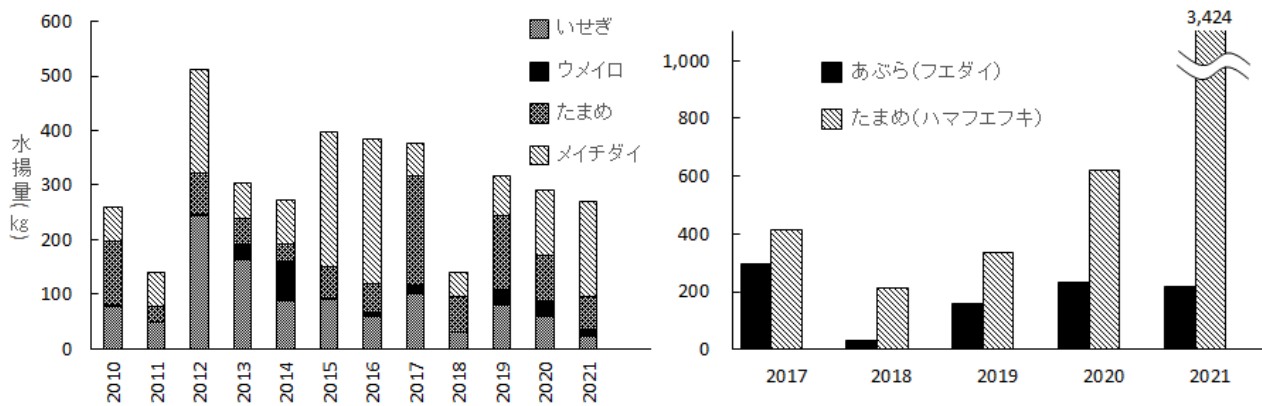


図4. 近隣県のアエダイ科、アエフキダイ科の魚の水揚量の推移。左は高知県漁協の海部灘にある支所(甲浦、佐喜浜町、椎名および高岡)における当該魚種の水揚量(高知県水産試験場提供)。いせぎはアエダイ、タマメはアエフキダイ属の魚と推定される。右は和歌山県串本町の串本市場における当該魚種の水揚量(和歌山県水産試験場提供)。

### 水温上昇の好影響か

アエダイ科、アエフキダイ科は単価が比較的安定して高い魚です。水温上昇は悪影響が話題とされがちですが、これらの魚の水揚げ増加は、漁家所得の向上につながる好材料といえます。まだ認知度の低いアエダイ科、アエフキダイ科の魚ですが、将来は徳島のブランド水産物の一角を占めるようになるかもしれません。

最後になりましたが、資料を御提供いただいた高知県水産試験場漁業資源課長清水様、および和歌山県水産試験場資源海洋部長木下様、関係漁協の御担当者様にお礼を申し上げます。

### 参考文献

- 海上保安庁海洋情報部「黒潮流軸数値情報」  
<https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAIYO/qboc/kurosio-num.html>, (アクセス日 2023年11月7日)
- FishBase ホームページ  
<https://www.fishbase.se/search.php> (アクセス日 2023年11月7日)